

## 《6つのパルティータ》

バッハは1726年からパルティータを個別に出版していき、1731年に全6曲をまとめて出版した。明らかに「組曲」と題してさし支えない曲集をあえて「パルティータ」としたのは、バッハのこだわりがあったと推測される。彼にとって組曲とは「アルマンド～クーラント～サラバンド～ジグ」といった舞曲によって構成されるものであって、トッカータやアリアが入るパルティータは「その範にあらず」だったのではあるまいか。また、バッハの各舞曲は前半／後半に峻別され、それはソナタ形式の提示部と展開部・再現部に相当するため、必然的に後半が長くなる。例えば、第1番のアルマンドは「18小節+20小節」といった具合に。

### パルティータ 第1番

短い「プレリューデウム」は、5声へと発展する前奏曲。それに続くのは、イタリア風の陽気な「アルマンド」。さらに、3連符のリズムで突っ走る「コレンテ」（イタリア式クーラント）、旋律の豊かな装飾性が際立つ「サラバンド」と来て、軽やかな2声の「メヌエットⅠ」と、ミュゼット風に凝った4声の「メヌエットⅡ」が交錯する。終楽章「ジガ」は、イタリア式ジグで、D. スカルラッティの特技だった、腕の交差テクニックをはじめて披露した楽曲だ。

### パルティータ 第4番

「序曲」は、リュリの作品を編曲した華麗な前半と、後半の3声のフーガからなる。「アルマンド」では、流麗なメロディが際立つ。第3楽章は、澁刺とした「クーラント」。まさにオペラを想わせる「アリア」、続く「サラバンド」も歌の交歓のよう。活気に溢れる短い「メヌエット」は、トリオ部を欠く。分散和音で進められる「ジグ」は、ポリフォニックな展開のなか、驚くほどの華やかさをみせる。

### 《フランス組曲》より 第5番

《フランス組曲》は1720～1722年頃、ケーテン時代の作とされる。その根拠は、第1番から第5番までが「アンナ・マグダレーナのための小品集」第1巻に含まれていることによる。

明朗な雰囲気満ちた第5番は、全7楽章からなり、《フランス組曲》のなかでももっとも演奏頻度が高い。冒頭を飾るのは、溢れんばかりの歌が魅力の「アルマンド」。それに、力強く疾走する「コレンテ」、優美な「サラバンド」、非常に有名だがあまりにも短い「ガヴオット」、軽快な「ブーレ」、古拙の味わいが光る「ルール」が続き、最後は、歓喜が爆発する「ジグ」で曲を閉じる。

### パルティータ 第6番

冒頭の「トッカータ」は、本来の意味である「即興的楽想～フーガ～即興的楽想」という三部形式を踏襲している。アルベジオからの自由な即興に挟まれた3声のフーガで、雄大な前奏曲のようだ。それに続くのは、装飾的に彩られた「アルマンド」。「コレンテ」は、ヴァイオリン・ソナタの原曲を想わせる急峻な曲。そして、軽快

な「アリア」を経て、第5楽章「サラバンド」は、フランス風を乗り越えた悲愴美の極致を示す。「テンポ・ディ・ガヴォット」は、ヴァイオリン・ソナタを想わせる。曲を締めくくるのは、対位法をつくる主題が大胆に展開され、低音の動きにより旋律が感じられる「ジーグ」。